

奈良フィルハーモニー管弦楽団

第52回定期演奏会



2023年 2月 25日(土) 13:00開場
13:30開演

奈良県文化会館 国際ホール

主催

特定非営利活動法人
奈良フィルハーモニー管弦楽団

後援

奈良県、奈良市、大和郡山市、奈良新聞社、朝日新聞奈良総局、読売新聞奈良支局、
毎日新聞奈良支局、産経新聞社、奈良フィル友の会、大和郡山市音楽芸術協会

Program

ヴァイオリン協奏曲二長調作品35 / P.チャイコフスキー

第1楽章 Allegro moderato - Moderato assai

第2楽章 Canzonetta. Andante

第3楽章 Allegro vivacissimo

交響曲第4番へ短調作品36 / P.チャイコフスキー

第1楽章 Andante sostenuto - Moderato con anima - Moderato assai, quasi andante - Allegro vivo

第2楽章 Andantino in modo di canzona - Più mosso

第3楽章 Scherzo: pizzicato ostinato. Allegro - Meno mosso

第4楽章 Finale: Allegro con fuoco

Program Note

★ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35

チャイコフスキーが作曲したヴァイオリン協奏曲は、ベートーベン、メンデルスゾーン、ブラームスと共に「四大ヴァイオリン協奏曲」と称される。1878年、友人であるイオシフ・コテックが、エドゥアール・ラロのヴァイオリン協奏曲第2番の譜面を抱えて、静養先のククランを訪ねてきた。チャイコフスキーは早速これを研究し、その成果として、わずか11日で本作のスケッチを行い、その後2週間でスコアを完成させたと言われている。

現在においては名曲として好まれているが、当時ロシアで最も偉大なヴァイオリニストとされていたレオポルト・アウアーに楽譜を送ったところ、「演奏不能」の烙印を捺され初演を拒絶されてしまう。その後、アドルフ・プロツキーの独奏でウィーンにおいて初演が行われたが、全く評価されなかった。しかし、プロツキーはその酷評に立ち向かうように、この作品を演奏し続け、次第にその真価が理解されるようになる。初演からこの曲の普及に尽力したプロツキーに、本作は進呈されている。

第1楽章 (Allegro moderato - Moderato assai) 二長調 ソナタ形式。協奏曲の半分の長さを占める楽章で、アレグロ・モデラートの序奏部とモデラート・アッサイの主部の構成である。第1ヴァイオリンから始まる序奏部では、オーケストラによって第1主題の断片が現れ、独奏ヴァイオリンを誘う。短いカデンツァの後、主部となり第1主題が伸びやかに提示される。軽快に進んだ後に現れる第2主題は叙情的で、また情熱的である。提示部は終始独奏ヴァイオリンが主導している。オーケストラのテュッティによる第1主題から展開部へと進み、独奏ヴァイオリンが加わり変奏した後に壮大なカデンツァとなる。再現部は、フルートが優しく第1主題を奏でてから、独奏ヴァイオリンとオーケストラが一体となって進み、華麗に第2主題が再現される。コーダは速度を速めながら、華やかな独奏ヴァイオリンの技巧と力強いオーケストラのテュッティによって楽章を閉じる。

第2楽章 (Canzonetta. Andante) ト短調 三部形式。静かな小品風の楽章である。管楽器のみの序奏に続いて、独奏ヴァイオリンが愁いに満ちた旋律を奏でる。中間部は変ホ長調となって、動きを持ちながらも情熱的に独奏ヴァイオリンが主体となって進む。旋律が回帰した後はオーケストラによる静かなコーダとなり、切れ目なく第3楽章へ移る。

第3楽章 (Allegro vivacissimo) 二長調 ロンドソナタ形式。快活なテンポとリズムの楽章である。オーケストラの序奏に続く独奏ヴァイオリンによる短いカデンツァの後、第1主題が歯切れよく演奏される。この主題はロシアの民俗舞曲に基づくもので、「くるみ割り人形」のトレパークにも近い。少しテンポを落とした第2主題は、やはりロシアの舞曲風であり味わい深い。徐々に快活な速度を取り戻す。その後は、またテンポを落として情熱的な旋律が続く。快活な再現部は、回帰した第1主題でオーケストラと独奏ヴァイオリンが見事に絡み合いクライマックスとなる。

★交響曲第4番 へ短調 作品36

チャイコフスキーの交響曲は、しばしば大きく2つに区分される。前期の3曲が民俗的な旋律を多く用いているのに対して、後期の3曲はヨーロッパで培われた伝統的な形式を尊重しながらも、ドラマチックな交響曲として統一されている。中でも第4番は最も情熱的な作品である。そしてこの曲には「わが親愛なる友に」との献辞が書かれており、チャイコフスキーの後援者であったナデージダ・フォン・メック夫人を指している。彼女は金銭的に多額の援助をし、夥しい数の文通も行っていたが、チャイコフスキーと対面することは生涯なかった。そしてこれらの手紙には「良き友」へ心中を吐露したものが多く、チャイコフスキーの内面を知る貴重な資料でもある。またこの交響曲の表題的解釈も、夫人に宛てた手紙に詳細に書かれており、楽章ごとに意図を記載している。

初演は1878年、サンクトペテルブルクにてニコライ・ルービンシュタインの指揮で行われた。

第1楽章 (Andante sostenuto - Moderato con anima - Moderato assai, quasi andante - Allegro vivo) へ短調 3/4拍子 - 9/8拍子 ソナタ形式。フォン・メック夫人への手紙において、「序奏はこの交響曲の中核、精髓、主想です。これは運命です。」とあるように、強烈な主題のファンファーレから始まる。主部は9/8拍子になり、弦楽器によって第1主題が提示される。憂に満ちたこの旋律は、繰り返されると徐々に白熱し、やがて静まる。テンポを落とすと、クラリネットが第2主題を変イ短調で

提示し、木管楽器を中心に進行する。そして第1主題と絡み合いながら高揚し、序奏の主題が現れて展開部となる。再現部の第1主題はこの上なく情熱的であり、トロンボーンユニゾンによる対旋律が効果的だ。これが徐々に熱を冷ましファゴットによる第2主題となる。コーダはテンポを上げ、運命的な序奏のモチーフと第1主題が共存しながら力強く終わる。

第2楽章 (Andantino in modo di canzona - Più mosso) 変口短調 2/4拍子 複合三部形式。「私達は過去を嘆き悲しみませんが、新しい生き方を始めるだけの勇気も意思ありません。私達は生活に疲れ果てたのです。」第2楽章について、フォン・メック夫人へこのように書いている。弦楽器のピッツィカートに伴いながら、オーボエが悲哀に満ちた旋律を奏でる。副次的な旋律と共に様々な楽器に受け継がれ、重々しく繰り返された後に中間部となる。少しテンポを速めた中間部はへ長調で、一転して明るくなる。同じ旋律は徐々に情熱的になり、そして静まる。回帰した主部の旋律は繰り返され、収束し消え入る。

第3楽章 (Scherzo: pizzicato ostinato. Allegro - Meno mosso) へ長調 2/4拍子 三部形式。「第3楽章には、はっきりした情緒も確定的な表出もありません。空想を勝手気ままに走らせると、酔っ払いの百姓と泥臭い唄との場面が飛び込んできます。遠くから軍楽隊の響きが聞こえます。これらはみんな、眠る人の頭の中を行き交うバラバラな絵なのです。現実とは何の関係もありません。」主部は弦楽器のピッツィカートのみ、中間部は管楽器のみで演奏される。夫人への手紙の通り、とりとめもない旋律が白昼夢のように現れ、また消えてゆく。重厚な交響曲の中において、軽妙なスケルツォが心地よい楽章である。

第4楽章 (Finale: Allegro con fuoco) へ長調 4/4拍子 自由なロンド形式。「あなたが自分自身の中に歓喜を見出せなかったら、あたりを見渡すが良い。幸福は、単純素朴な幸福は、なお、存在する。人々の幸福を喜びなさい、そうすればあなたはなお生きて行かれる。」と、夫人に書いている。フィナーレの第4楽章は、テュッティによる強烈なロンド主題の提示で始まる。それに続く主題は、ロシア民謡「白樺は野に立てり」から引用されている。これらの主題は表情を変えながら幾度も演奏される。そして突然第1楽章の凄烈な主題のファンファーレが再登場する。しかしここでは、その運命の啓示を跳ね除けるように歓喜を取り戻す。そのままコーダに突入すると、運命に勝利した事を祝福するように白熱し締めくくりとなる。(解説：鎌原 直)

日本音楽財団

日本音楽財団は、1974年に日本国内の音楽文化の振興と普及を目的として設立され、創立20年を迎えた1994年からは、西洋クラシック音楽を通じた国際貢献を目的として、弦楽器名器の貸与事業を行っています。保有する世界最高クラスの弦楽器を21挺（ストラディヴァリウス製ヴァイオリン15挺、チェロ3挺、ヴィオラ1挺、ガルネリ・デル・ジェス製ヴァイオリン2挺）を若手有望演奏家や世界で活躍する演奏家に国籍を問わず無償で貸与し、同時に、これら世界の文化遺産ともいわれる名器を次世代に継承するための保守・保全を行っています。また、楽器被貸与者による演奏会を日本国内外で開催し、名器の音色に触れる機会を提供しています。日本音楽財団の事業は、日本財団の全面的な支援により実施されています。

Nippon Music Foundation

Nippon Music Foundation was established in 1974 with the objective to “enhance music culture” in Japan. In 1994, the Foundation started the “Instrument Loan Project” through which the Foundation has strived to make international contributions by loaning the top quality stringed instruments acquired by the Foundation. The Foundation now owns 21 stringed instruments (15 Stradivarius violins, 1 viola, 3 cellos and 2 Guarneri del Gesù violins), and as the custodian of these world cultural assets, maintains them for future generations and loans them gratis to internationally-active musicians regardless of their nationalities. The Foundation provides opportunities to listen to the beautiful sound of its instruments played by the loan recipients by organizing a number of concerts worldwide. The Foundation’s activities are made possible by the generous support of The Nippon Foundation.

奈良フィルハーモニー管弦楽団 52回定期出演メンバー

●コンサートマスター 寺西一巳

第1ヴァイオリン (●首席 ★アシスタントコンサートマスター)

★相原 瞳 ・ 佐藤智子 ・ 袴田さやか ・ 大家 曜
 ・ 烏田朋子 ・ 外園美穂 ・ 松井道子 ・ 立花礼子
 ・ 水野万裕里

第2ヴァイオリン

●桑原謡子 ・ 佐藤恵梨 ・ 川村紀子 ・ 水口真緒
 ・ 中野裕子 ・ 藤田素子 ・ 大津直子 ・ 取田悠希
 ・ 大西秀朋

ヴィオラ

●辻田結城彦 ・ 上野博孝 ・ 武田充代 ・ 氏橋良江
 ・ 富田朋子 ・ 小間久子 ・ 山際 新

チェロ

●大西泰徳 ・ 尾崎達哉 ・ 伊原直子 ・ 幸野久司
 ・ 福田浩丈 ・ 相浦 薫

コントラバス

●林 俊武 ・ 河村久美子 ・ 吉田有音 ・ 北田由美
 ・ 宮田雄規

ピッコロ フルート

・ 本庄ちひろ ●原 祐子 ・ 中里美沙

オーボエ

●前橋ゆかり ・ 廣瀬裕美

クラリネット

●西川香代 ・ 近藤正也

ファゴット

●小西朋子 ・ 植田志穂

ホルン

●世古宗 優 ・ 米崎星奈 ・ 海塚威生

・ 垣本奈緒子

トランペット

●福中 明 ・ 中島 真

トロンボーン

・ 岸部雅史 ・ 瀧上源太郎 ・ 赤井寛延

チューバ

・ 川岸三哲 ●田中雅之

パーカッション

・ 清川大地 ・ 佐治朋美 ・ 吉田周平

Profile

《特定非営利活動法人 奈良フィルハーモニー管弦楽団》

奈良フィルハーモニー管弦楽団は、「奈良にプロ・オーケストラを!」と、志ある音楽家たちが集い、1985年に結成したプロ・オーケストラ。メンバーは、高度な音楽教育を受け、ソロやアンサンブル等にも活躍する他、積極的に後進の指導にもあたっている。奈良での演奏会も定着し、その音の美しさと緻密なハーモニーは、聴衆から高く評価をうけている。

奈良県主催「なら・ミュージックフェスティバル」石丸 寛「トーク&コンサート」、「オープニングフェスタ」宮川 泰「ハッピーコンサート」、「山本直純」のゆかいなコンサート」に出演。20世紀最後の大晦日に生駒市でカウントダウンコンサートに出演、2001年「宝くじコンサート・奈良フィルハーモニー管弦楽団特別演奏会」に出演、同じく、斑鳩町文化振興財団主催「奈良フィル&オリヴィエ・シャルリエコンサート」に出演。同年6月大和郡山市21世紀記念事業「第九演奏会」に出演。以後2002～2005年、やまと郡山城ホール主催「大和郡山市民第九演奏会」に出演。

また、'99年、2000年、2001年香川県仲南町に招かれる。「子と親の楽しいコンサート」を各地で開催し、青少年の情操教育にも力を入れている。

日本を代表する指揮の秋山和慶氏と世界的なヴァイオリニスト、オリヴィエ・シャルリエ氏を迎えての20周年記念第15回定期演奏会は、大好評を博した。

やまと郡山城ホールにおいて2002年より毎年ニューイヤーコンサートに出演。

2006年から2016年の10年間「なら燈花会プロムナードコンサート」に指揮者 金聖響、横島勝人、阪哲朗、矢澤定明、和太鼓奏者 林英哲、ピアニスト メジューエワ、近藤嘉宏、仲道育代、小川典子、横山幸雄、ジャズピアニスト山下洋輔、二胡奏者チェン・ミン、テノール歌手錦織健、ヴァイオリニスト川井郁子、チェリスト宮田 大と共に共演。2008年10月東大寺大仏殿前に於いて、東大寺世界遺産登録10周年記念コンサートに出演。第1回「ならピ!」に出演。2013年より奈良県主催「ムジックフェストなら」に県民一般公募の合唱団と第九を演奏。その美しく迫力ある演奏に好評を博す。2015年11月1日青島広志氏を迎えて奈良フィル30周年特別記念演奏会を開催。

'97年に第1回定期演奏会を開催し、以降、年2回のペースで定期演奏会と、月1回のサロンコンサートを開催。

2021年栗辻聡氏を正指揮者に2022年延原武春氏を音楽アドバイザーに迎え、さらに地域に根差したオーケストラを目指し、結成当初の「もっと楽しいコンサートを!」を今もモットーに、近畿一円の公共団体及び各種団体からも招かれ、演奏活動を行っている。

奈良県のプロ・オーケストラとして日本オーケストラ連盟に籍を置く。日本オーケストラ連盟準会員。



Conductor
栗辻 聡

2015年、第6回ロプロ・フォン・マタチッチ国際指揮者コンクールで第2位を受賞し、一躍注目を浴びる。2011年、京都市立芸術大学音楽学部指揮専攻を首席で卒業し、音楽学部賞並びに京都音楽協会賞を受賞。その後、オーストリア国立グラーツ芸術大学大学院オーケストラ指揮科、スイス国立チューリッヒ芸術大学大学院指揮科を首席で卒業。在学中には、数々のオペラ公演やオーケストラ公演を指揮した。

これまでに、ザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団、マケドニア・フィルハーモニー管弦楽団、ヤナーチェク・フィルハーモニー管弦楽団、フラデッツ・クラロヴェ・フィルハーモニー管弦楽団、ムジックコレギウム・ヴインタートゥール、バート・ライヒェンハル・フィルハーモニー管弦楽団、聖クリストファー室内合奏団、ルーセ・フィルハーモニー管弦楽団、オタワ・ナショナル・アーツ・センター管弦楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、札幌交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、中部フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、日本センチュリー交響楽団、大阪交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、兵庫芸術文化センター管弦楽団、山形交響楽団、広島交響楽団、九州交響楽団、オーケストラ・ジャパン等を指揮している。オペラの分野では、「ラ・ボエーム」、「アドリアーナ・ルクヴルール」、「夕鶴」等を指揮し好評を博す。

これまでに指揮を、秋山和慶、尾高忠明、増井信貴、谷野里香、マルティン・ジークハルト、ヨハネス・シュレーフリの各氏に、オペラ指揮法をウォルフガング・ボジチ氏に師事。指揮講習会においてベルナルト・ハイティンク、デイヴィッド・ジンマン、エサ＝ベッカ・サロネン、アンドリス・ポーガ、鄭致溶、井上道義、湯浅勇治、飯森範親、沼尻竜典、下野竜也の各氏から指導を受ける。

ムジカA国際音楽協会会員、公益財団法人明治安田クオリティオブライフ文化財団音楽奨学生、2012年度公益財団法人ロームミュージックファンデーション音楽奨学生。第28回京都芸術祭音楽部門亀岡市長賞受賞。

奈良フィルハーモニー管弦楽団正指揮者、奈良フィルハーモニー混声合唱団指揮者、京都市立芸術大学音楽学部指揮専攻非常勤講師、大阪音楽大学講師。



Violin
ベンジャミン・バイルマン

ベンジャミン・バイルマンはカーティス音楽院を経て、クリスティアン・テツラフの下、クロンベルク・アカデミーにて学んだ。2022年4月、カーティス音楽院の教授に最年少で就任。

これまで、シカゴ交響楽団、フィラデルフィア管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、フランクフルト放送交響楽団、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、シドニー交響楽団等の主要オーケストラと共演している。指揮者では、ヤニック・ネゼ＝セガン、オスモ・ヴァンスカ、エドワード・ガードナー、ジャンカルロ・ゲレロ等の著名な指揮者と共演している。

室内楽においては、カーネギーホール、リンカーン・センター、コンセルトヘボウ(アムステルダム)、ベルリン・フィルハーモニー、ウィグモア・ホール、ルーヴル、東京文化会館等でリサイタルを行う他、ヴェルビエ音楽祭、エクス・アン・プロヴァンス・イースター・フェスティバル、ミュージック・アット・メンロー、マールボロ音楽祭等に出演している。サンタバーバラ(カリフォルニア)のロベロシアター室内楽プロジェクトではアドヴァイザーを務める。

ストラヴィンスキー、ヤナーチェク、シューベルトの作品を収録したCDをワーナークラシックスからリリースしている。

日本音楽財団保有ガールネリ・デル・ジェス1740年製ヴァイオリン「イザイ」を使用している。



●ガールネリ・デル・ジェス1740年製ヴァイオリン「イザイ」

この楽器はベルギーの国家的ヴァイオリン奏者、ウジェーヌ・イザイ(1858～1931)が所有していたことからこの名前が付けられた。楽器の中に貼られた小さなラベルには赤いインクで「このデル・ジェスは私の生涯を通じて忠実なパートナーだった。イザイ1928」とフランス語で書かれ、イザイの国葬の際には棺の前をクッションに載せられ行進したことで知られている。1965年に巨匠アイザック・スターン(1920～2001)の所有となり、1998年に日本音楽財団がこの楽器をスターンから購入した後も、生涯に渡り愛用した名器である。

奈良フィル友の会会員

私たちは奈良フィルを応援しています。(入会順、敬称略)

特別会員

- ・砂川医院
- ・広陵町
- ・医療法人康仁会 西の京病院
- ・高砂建材工業株式会社
- ・株式会社アイティエヌジャパン
- ・柳沢診療所
- ・株式会社・斑鳩
- ・大和郡山市
- ・身体障害者支援施設どんぐり
- ・吉岡印刷株式会社
- ・奈良信用金庫
- ・有限会社キョウワ ハーモニーケアサービス
- ・王寺町
- ・大和信用金庫
- ・奈良中央信用金庫
- ・株式会社コスモエレベータ(河合町)
- ・株式会社ウエストワン